滿洲文化の發展

目次

第一章　滿洲に「文化問題」ありや（序説）……一
第二章　滿洲文化の自然的環境……五
第三章　滿洲に於ける先史文化……一一
第四章　滿洲民族考……一九
第五章　古代漢族文化と滿洲族文化との交渉……二七
第六章　滿洲移民考……三六
第七章　十九世紀に於ける滿洲文化……四五
第八章　滿洲文化の現階段（世界經濟に於ける滿洲の地位）……五二
第九章　滿洲文化の展望（結語）……六六

滿洲文化の發展

伊藤武雄

第一章　滿洲に「文化問題」ありや（序說）

文化（Kultur）が現代滿洲に於て何の程度に問題たり得るやは一個の問題である。一般通念による文化問題の對象として、滿洲を考へるとき、其內容の貧弱を嘲たねばならぬ。文化史的見地に立つにしても、其材料の開拓程度は幼稚の域を免れない。

併し乍ら與へられた問題に對しては、應へを書かねばならぬ。先づ筆者の觀念態度を規定してかからう。

リツカートは其著「文化科學と自然科學」（其第三版一九一五年）第四章、自然と文化の中で自然と文化について次の如く定義して居る。

「自然の生產物は自由に土地から生長したものだが、文化の產物は、人が地を耕し、

種を播いた結果、土地から生育するものである。換言すれば、自然は自ら生れたもの自らなる生長に委ねられたものの總和である。之に反し文化は、價値ありと認められた目的に隨て行動する人類に由て直接生產されたものか、又は既に自然に存在するものであつても、少くも夫に附着せる價値の故に有意的に保護されたもので、自然と對立關係にある。文化客觀には價値が結びついて居る。その文化客觀を財と名付ける。

宗教、法律、國家、風習、科學、言語、文學、藝術、經驗竝に是等の勞作に必要な專門的方法等は凡ての發展段階に於て次の意味で全く文化客觀卽ち文化財である。卽夫等に附着して居る價値が社會の各部分から妥當なものとして認められるか、又は夫等の是認が彼等に基くといふ意味に於て」と。

筆者の認識も亦リツカートの範疇に追隨せんとするものではあるが、更に之を敷衍して、文化目的の素材たる自然環境、產業諸關係等も文化問題たり得るものと考ふるが故に本編に扱はんとする範圍も成るべく廣義の解釋に從ふ。道德、宗教、哲學、藝術の如き所謂精神的文化(狹くは是のみを文化といふ)、自然科學、經濟、法律制度、技術の如き(「シヴイリゼーション」の語を使ふものあり)所謂物質文明の基本文化等を區別すること

なく、人間の有意的活動によつて、自然素材に或價値概念を附した渾一的體系の總括であり、諸種文化內容は相關關係に立ち、文化全體として一個の統一體たりと認識せんとする。

「文化進展」の意義としては文化內容の增加といふ事が考へられる。如斯文化內容の增加は、人種、地理的條件、人口增加等自然條件に左右せらるると共に、氣候の寒暖、乾濕度の相異等民族性格に影響を與へ從て其成果たる文化を特徵付け其發展に影響すると考へられる。又灌漑の有無、山野の狀態等は文化發展に影響すると考へられるし、人口の增加に伴ふ諸社會間の抗爭、國家の成立興亡、思想や宗教階級觀念の發生等文化に新しき態樣が賦與せらる。社會相互間の接觸融合の度合ひによつても文化內容は增進せられる。更に發達なる概念に對して形而上學的價値への進步、理想的人間性の完全なる擴大といふ事を意味さすなれば、文化の發達とは單に文化內容の增加考察のみならず夫等の內容がいかに眞、善、美、聖等の所謂絕對的價値(但し其標準は各時代により異る)に向て前進し且つ內容を豐富にし充實し來たかの考察をなすべき事となる。卽社會進步の考察である。各種の文化理想が調和協合に向つて進まねばならぬ。

以上「文化進展」を定義した上で、さて滿洲なる對象をレンズの前に立てると、うつる影像はピントこそ外れて居ないが、構圖としては極めて纏りのわるいものであることを否めない。現在の私としては滿洲文化生成過程の諸條件としての諸問題を提出するより外道のないことを感ずる。

「滿洲文化の自然的環境」に於て文化素材を一瞥し、「滿洲に於ける先史文化」に於て未だ開拓されざる滿洲先史民族の研究の必要を示唆し、「滿洲民族考」本問題も亦研究の萌芽時代に過ぎぬと考へる。「古代漢族文化と滿洲族文化との交渉」に於て漢族文化が從來の滿洲文化に及ぼした最大のものなりとの考から、漢族文化を無視して、滿洲族文化は考へられず、漢族文化も亦塞外民族により清新さを與へられねば今日の長命を來さなかつた點を示さうと試みた。次に「滿洲移民考」をおいて、滿洲が古來遊牧民の地にして土着民(農業者)としては漢人種のコロニーとして最も意義あり將來も輕視すべからざることを考へたれば貧弱な資料中から本章を綴つた。「第十九世紀に於ける滿洲の文化」は、次の「滿洲文化の現階段」の序節として、資本主義以前の純農業經濟滿洲の姿を不完全な態で素描し、後章に於て、滿洲經濟の資本主義過程への推移を、結章の「滿洲文化の展望」に於て、今次滿洲事變を契機として、斯の地滿洲が、太平洋政局に於て如何なる役割を演ぜんとするか、將又將來世界文化史に對し、如何なる關係に立つべき傾向を示しつつあるかを朧氣なる見透しに於て示唆した積りである。

之を要するに滿洲文化の研究領域は、將來の開拓にまつところ多く、新進學徒による新領域の科學的闡明と綜合との成就せられんことを期待しつつ本編を草した。

第二章　滿洲文化の自然的環境

一　「人は地表の產物である。といふ意味は單に人は地から生れ、地上の生物であるといふ許りでなく、地は人を育て孕み彼に仕事を與へ其思想を導き彼を試練し其體軀を錬え智慧を磨かしむるものである(航海の術を考へさせ、灌漑法を訓ふる等)。……彼は其耕す地を離れて、其旅する土地を離れて、通商する海を離れて、其科學的研究を體得し得ないこと、恰も北極熊や沙漠のサボテンが其環境に從ふ習性を賦與せらるると同樣である。但し人の自然環境に對する關係は、自然に最もよく適合して動植物の夫よりも、より複雜でより多岐により無限である點に相異がある」と Ellen C. Semple が其名著 Influe-

米以下の丘陵にして(滿鐵驛公主嶺附近)其南北は漠然と氣候、風土、民俗經濟事情を異にするものあれど明瞭ではない。南北を通じて多少の丘陵的起伏あるも概ね平坦廣濶、野は肥え農耕地として農產豐なるも、沙漠性地方、放牧草原も亦少くない。南滿の耕地は多く既耕地であるが北滿には處女林又は可耕未墾地が全域の半以上である。全滿洲に於ける可耕地面積は約二千萬町歩、其內可耕未墾地は尙四百五十萬町歩を殘して居る。

滿洲に於ける水系の著しい特長は、氣候の乾燥降雨量の少きため砂塵の流失多く、且つアルカリ質物質の含有量豐富な爲溷濁して居ること、夏期水量あるも冬期は地下水となつて表面に水流の認められぬことである。滿洲農耕に絕對必要なるものこの水量である。乾燥のため、蒙古の沙漠地と見ゆる地方に於ても、實際は沃地であるところ少くない。

現在人口稀薄交通不便と雖も將來の發展可能地約百五十萬町歩を推定し得る。

滿洲に於ける森林地帶は、北東境に分布して居る。第一に鴨綠江域九十八萬町歩(朝鮮側百八十萬町歩)、第二に松花江、豆們江、牡丹江域三百萬町歩、所謂吉林材の產地である。第三東支鐵道東部沿線の樹海西部興安嶺地方計四百五十萬町歩がある。其以外卽耕地とされた地方は無木地帶と稱せられる程樹木が尠い。

五　氣候氣溫　滿洲の緯度北緯三八度半から五三度半に及び、山形縣より樺太の南端に達し、且つ西比利亞平原に對し何等の障害なきを以て極寒凜烈である。氣候は內陸的大陸性で寒暑の差著しい。夏期日中氣溫三十八九度に昇るに對し、冬は零下四十度に降る。且つ乾燥して降雪少く地中溫度も極めて低い。地下數米まで結氷する。降霜期は北滿にありては九月中旬、南滿は下旬に始まり、五月中旬又は下旬に夫々了る。故に耕作可能日數は百五十日乃至二百日間であり、農作物は夫に適するもののみに限る。されど生物には氣候に順應する性質をもつが故に、滿洲に於ける植物も其環境に對し次第々々に順應して行く傾向がある。日本の櫻が先づ安東に花咲き、大連に茂り、奉天、長春、哈爾濱にまで及ぶ日を期待することは夢ではない。There is a continuing urgency towards fresh change. (H. G. Wells)

第三章　滿洲に於ける先史文化

「新石器時代に於ける支那文化に二中心があつた。一は支那の極西奧亞細亞へ通ずる軍路往還に當る甘肅であり、一は極東海岸に近い滿洲であつた。共に相異つた新石器時代

の出土品によつて判斷せらるる。西方文化は進んで南露及バルト海地方に關係し、一方滿洲出土の陶器は、其彩色模樣に於て日本出土品及沿海州文化に關連を有することが證せられて居る。(Richard Wilhelm: Geschichte der Chinesichen Kultur. p. 45) 〔註〕

（筆者註）　叙述の資料は下記に據るならん。

J. G. Andersson: An Early Chinese Culture, Bulletin of Geological Survey of China, No, 5, 1923.

Preliminary Report on Archaeological Reseach in Kansu, Mem. Geol. Survey. China, Ser. A. No. 3, 1925.

The Cave Deposit at Sha-Kuo-T'un in Fengtien, Palaeontologia Sinica, Ser. D. vol. I, Fasc. I. 1923.

「南滿洲の北と北滿洲の南との間に元來如何なる文化の迹が遺されて居るかといふに、之を民族上より觀察すれば大略二つに分つことが出來る。卽漢族以外の分が一つ、これには先史民族石器時代の住民、遼金の住民及滿洲族があり、第二に純然たる漢民族の文化がある。蒙古族の分は極めて少い。第一は古き時代に多く、新しい時代のものは少い。之に反し、漢族の分は新しい時代に限る。地域的に謂へば、漢族の分は開原以南卽遼河流域に限り漢族以外の分は南北滿洲を通じて遍在する。（八木奘三郎氏著「滿洲古墳志」上）

滿洲先住民族に關する研究は尙幼稚の域を脫しない。瑞典の地質學者アンダーソンの奉天錦西沙鍋屯に於ける仰韶文化と同時代の彩色土器の發掘 (An Early Chinese Culture, 1923, Peking) 東方考古學會編するところの「貔子窩」「牧羊城」の二雄編、鳥居博士の諸研究、八木奘三郎氏著「滿洲古墳志」「續滿洲古墳志」「滿洲考古學」、ロシア人シロコゴロフ氏著するところの滿洲人種に關する人類學的社會的諸研究、白鳥、內藤、箭內諸博士の「滿洲歷史地理」研究は筆者の知る權威あるものの若干である。

八木奘三郎氏著「滿洲古墳志」中より滿洲に發見された諸遺蹟一覽表を借用して、滿洲先史民族先住民族の殘した迹を一覽する。尙同表にはアンダーソンの仰韶彩色土器の發見地、沙鍋屯や契丹文字の刻せられた碑石の發掘された、林西其他諸地、立派な漢代古墳完全型の發見された關東州牧城子や、石刻古墳のあつた鞍山等は、摘錄されて居ないが、滿洲先住民族活動の跡を一目に見得る極めて便利な表である。

（甲）　先史時代に屬する貝塚及び包含の部

番號	時代	種類	位置	所在地	摘要
1	先史	遺物包含層	臺地	旅順管內老鐵山刀家屯牧羊城附近	石器、土器等多く出つ、石斧に特徵あり
2	同	貝塚	同	同　郭家屯南山裡	土石器以下遺物の分量頗る多し

3	先史	遺物包含層	臺地	旅順管内柏嵐子	石器出づ
4	同	貝塚	同	羊頭灣北方の臺地	石器相當に出づ、土器片もあり
5	同	同	低地	同　双島灣	遺物極めて少し
6	同	同	山上	同　大臺山上鞍部	土石器多く出づ
7	同	遺物包含層	山腹	同　王家屯會鹽廠大孤山	同
8	同	同	山上	同　三澗堡會龍頭驛近傍于太山	土石器多く出づ、而も今日は樂めて乏し
9	同	貝塚	山麓	同　營城子會小老孤山	遺物極めて少數なりと云ふ
10	同	遺物包含層	臺地	大連市伏見臺（今其迹なし）	土石器
11	同	貝塚	同	同　濱町（今其迹なし）	遺物雄大にして其數亦多し
12	同	同	海岸高地	大連管内傅家庄	石器少許有り
13	同	同	臺上	同　柳樹屯稻荷神社近傍	土石器多く有り
14	同	同		金州管内馬家屯と圓家屯間の河岸	同
15	同	同	山上	同　望海堝城	土石器類出づ
16	同	遺物包含層	同	普蘭店管内長山里南方臺子山上	同
17	同	同	河畔	同　林家屯會	石器出づ、石棺樣のものありしと云ふ
18	同	貝塚	臺地	貔子窩管内碧流河屯三島子	土石器多く出づ
19	同	遺物包含層	山上	大石橋盤龍山上	同
20	同	同	平地	遼陽鐵橋の東方	土石器出づ
21	同	同	山麓	撫順千金寨南麓	石器出づ
22	同	同	臺上	同　永安臺	土石器出づ
23	同	同	同	奉天東陵丘上の東北方	同

先史時代古墳の部

1	先史	石塚	山上	旅順管内老鐵山北方の山地	打揃きたる人頭大以上の石を積み重ねたるもの
2	同	同	同	同　柏嵐子西方の山上	同　上　猶營城子にもありと云ふ
3	同	大石硼	臺上	普蘭店管内亮甲店	ドルメン式大石槨なり
4	同	小石硼	低地	同	
5	同	大石硼	臺上	九寨驛の西北	
6	同	同	同	蓋平の東南八九里の地點	
7	同	小石硼	同	同	
8	同	石硼	同	大石橋の北分水驛の東方二里位の地	石硼峪の地名あり恐らく石硼存在の地ならん

（乙）有史時代古墳の部

番號	時代	種類	位置	所在地	摘要
1	漢魏	貝墓	臺地	旅順管內老鐵山敦家屯北方	隆起物は見へざれども地下に存せり
2	同	甎墓	同	同	同
3	同	同	平地	同　營城子驛北方	七方子の如き高きものあり
4	同	貝墓	臺地	大連市中央公園內	
5	同	同	同	大連灣對岸	
6	同	甎墓	同	金州管內楊家店方面	
7	同	高塚	山上	普蘭店驛の北方餘々山	
8	同	同	山地	普蘭店管內唐家房北方山麓	
9	同	貝塚	平地	熊岳城河畔其他	當地の貝墓は諸所に在りて一定せず
10	同	貝墓	同	蘆家屯驛沙河邊	
11	同	甎墓	同	遼陽驛近傍及鐵橋の東方	
12	同	石棺槨古墳	同	同　上　及城郭の南門外	石槨の大なるものは太子河河畔と南門外とに在り
13	同	石槨古墳	同	同　東方高城子	

住居跡の部

1	漢魏	住居跡	平地	熊岳城溫泉近傍

古陶窯の部

1	遼金	古陶窯跡	臺地	撫順古城子邊
2	同	同	同	太子河上流江官屯河岸

古泉發見地の部

1	周代？	齊刀（泉貨）	臺地？	旅順管內營城子近傍
2	同	刀布（明刀及列國布）	同	魏子窩管內碧流河方面其他
3	同	同	同	熊岳城附近蘆花屯邊

同城郭の部

1	漢代	牧羊城	高臺	旅順管內老鐵山北西方刁家屯
2	同？	高城子	平地	遼陽の東方河畔
3	高勾麗	石城	山上	同　營城子の南方
4	同	同	同	金州大和尙山上

碧流河の北方管外の古城跡よりも刀布を出すと云へり
猶鞍山市街より壺入の列國布を數百枚出せしことありと云ふ。
城の內外より銅劍、銅鏃、銅鉢、古瓦等を出せり

今取り去られて其跡全くなし

5	高勾麗	石城 山城 龍潭	山上	得利寺驛の北西方の山上	
6	同	同 蓋平の石城、山城	同	蓋平城の東北隅石城山	
7	遼代	土城	平地	熊岳城の西々南歸州	
8	同	土 石城	臺上	大石橋西北隅の岳州	
9	同	同	平地	奉天東陵の南方渾河河畔	
10	金代	石城	山上	遼陽の東方巖州城	
11	明代	甎城	臺上	貔子窩紅水城	
12	同	石城	平地	營城子木楊城	
13	同	同	同	普蘭店市外	
14	同	甎城	同	金州城	清朝の重修あれども初築は明代なり
15	同	同	同	熊岳城	同
16	同	同	同	蓋平城	同
17	同	同	同	海城	同
18	同	同	同	遼陽城	同
19	清代	甎 石城	臺上	遼陽の東方東京城	
20	同	甎城	平地	奉天城	
21	明代	甎 石城	臺上	鞍山店	
22	同	甎城	平地	撫順城	
23	同	石城	山上	普蘭店管内亮甲店近傍望海窩城	

第四章　滿洲民族考

一　バックストンは其著「アジアの住民」の中に於て曰ふ、歐洲人による滿洲、支那人による東北省は今支那本部の一部を形成して居るが、この地は民族的別域とまでは言へぬにしても、支那本部と區別して取扱はるべきことは確かである。殊に滿洲朝の出現以來殊に然りといふべきである。

滿洲の地は北から南に興安嶺山脈が貫通して居る。東南方の長白山脈と共に政治的境界といふよりも西北方の民族的境界と見る方が適當である。南部中央は冲積層平野にて奉天省の大部分を占めて居り農業的價値大なのものがある。東北に續く松花江流域と連續し、北部竝に中部は廣大な沼地起伏狀森林帶である。

滿洲には二つの入口がある。南は黄海よりするもの北は黑龍江流域平原よりするものである。この二入口が滿洲民族史に重大な關係をもつ。卽西比利亞との境界は黑龍江で

あるが、これは決して民族的境界とはなり得ない。

滿洲に於ける民族の人類學的研究は進んで居ないのみならず、古代建國名の甄別すら確然として居ない。要するに地勢の然らしむるところ、滿洲は古代より今日に至るまで凡て移住民によつて占據せられ、其爭鬪が繰り返へされた土地である。(Baxton :—People of Asia P. 187)

二　今日の普通歴史上に載せられて居る順序によつて滿洲に興亡した民族竝に集團を擧げて見れば、第一に三國時代に「肅愼」なる名がある。露領沿海州、黑龍江、吉林一帶に居た民族の樣である。支那古書(例へば魏志)には之を「挹婁」とも稱して居る。兩者の區別は、時代の前後關係にあるか、又は一方は地名で一方は民族名なりや等判然しない。同時に西部卽奉天遼河域には「濊貊」なる民族ありしと稱せられる(この族は山東の一角から滿洲の西入口から移住したものとの說がある)。而も其後裔と通說せらるる「扶餘」族を滿洲最初の民族と稱する說もある(三國志、後漢書)。要するに混沌として分明を缺いて居る。但し漢末五胡十六國の亂に東北民族の慕容氏(鮮卑族)北支那を犯した事は歴史に瞭かである。

「扶餘」の後と稱する「高勾麗」は大國家を形成して滿洲を統一し隋唐時代にまで及んで居る。其版圖、北は長春、東は日本海、南は朝鮮の漢江、西は遼河に亙る域を占め各地に城砦を築いた(今日南滿各地に其名を留むるもの少くない。第二章十七頁參照)。而も其時代「扶餘族」の名は農安地方に、沿海州地方には靺鞨(挹婁—勿吉—靺鞨なりといふ學者あり)、高勾麗は二十八主、七百五年(B.C. 37-A.D.668)の長きに亙つて覇を稱へた。唐の高宗高勾麗を滅して滿洲を安東都護府の管下に附けた。

玄宗時代「粟末靺鞨」の酋長は、「挹婁」の故地に「渤海國」を建てた。黑水靺鞨は黑龍江下流に居り、粟末部は松花江上流に據つた。現、東京城(寧古塔西南)は其都忽汗城の遺址と稱せらるる。唐の封册をうけ唐の制度文物を納れ頗る文化國となつた。日本との交通ありしこと日本歴史に見ゆる(聖武天皇神龜四年)この國は七一三年から唐の明宗の時代九二六年「遼」に滅さるるまで十四王二百十五年間勢威を張つた。

「渤海」を滅した「遼」は契丹族である。「契丹」は東胡(東胡—鮮卑—契丹)の裔族と稱せらるる。唐末隆興、北方に「室韋」族(鮮卑、靺鞨の混族)を降し黑龍江域を併せ、天山、青海地方をも征服し、北支那に侵入し「契丹國」と稱し、耶律楚材の才幹遂に宋を南に逐

ひ、「遼」帝國の建設となつた。「契丹」の名は Kitai, Cathay の名に於て今日に殘つて居る。九〇七年の興起より「金」に滅された一一一三年に至る九帝二百十年の間覇を稱した。

「遼」を滅したのは、「女眞」族の阿骨打である。女眞は黑水靺鞨部族となつて居る。一度は遼の節度に服したが、次第に勢を張り、遂に遼の上都臨潢を陷れ一一一五年自立して「大金」帝國と稱した。哈爾濱東方阿城縣の白城は、上京會寧府の跡である北支那に侵入し、宋を江南に壓迫し、北京に都し、其兵江浙に及び、淮水を以て境界とした。其版圖、滿洲蒙古の全域北支那を含む空前の大帝國となつた。遼と同樣に漢人を用ひ漢族文化を吸收し、女眞大學を作り、女眞語を以て支那古典を翻譯し、青年子弟の教育に努めた。其結果遂に文化民と化し蒙古軍の興りし時は、之に敵する能はず、一二三四年鐵木眞に滅された。

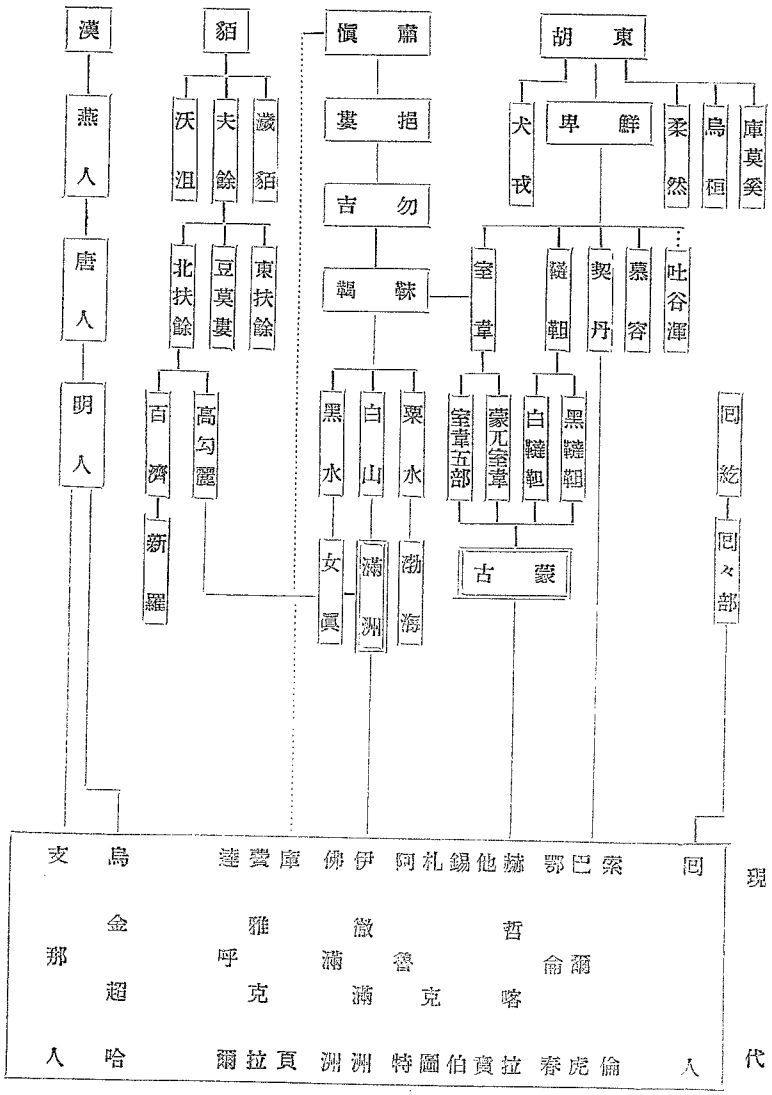
元、明二代に於ける「東北民族」は暫く雌伏して振はなかつたが、明の威令は長柵を以て限りとし、柵外は東夷懷柔政策によらざるを得なかつた。女眞民族亦分立して統率者を缺き明の邊境擾亂をなすに過ぎなかつた。

然るに十七世紀初に至るや「建州女眞」の酋長奴兒哈赤、愛親覺羅部を率いて立ち、遼東に侵入した明の勢力を驅逐し、南北滿洲を統一し、東部內蒙を從へ、一六一六年「後金國」を稱し興京に都した。一六二六年瀋陽に遷り、四四年に關內に侵入し、北京に遷り、大清帝國を稱し、盛京(瀋陽)を留都とした。

清朝二百七十年東北民族最盛期であつた。康熙、乾隆不世出の英傑（この二帝の業蹟を詳述することは滿洲民族史研究の爲に必要なる事であるが）の下に、清朝國家の版圖は、唐の盛時に及び、漢民族の長所美點を發揮せしめ、文學美術に素晴らしき發展をなさしめた。清朝三代の世祖北京遷都に際し滿洲民族は僅に百萬、壯丁數二十萬に過ぎなかつた。之の寡數を以て、約一億の漢人種を支配した能力驚くべきものである。清室の藩屏滿洲八旗、中原要地に駐するや嚴重に漢人との同化を妨ぎ、遼金同化文弱の轍を踏まざらんことに努めた。

歲を經月を閱する二百七十年、一九一一年、清朝の社稷は、武漢に擧げられた「滅滿興漢」の旗に倒さるるまで滿洲民族の支那本部漢人種に對する關係は、獨立に非ざれば漢族征服の關係にあり、漢族による被征服關係は極めて限られたる時期、地域に過ぎなかつた事は注意すべきであらう。

東北民族系統圖



其漢族統治に當つて、滿洲八旗、中原各都に屯して所謂タタールシテーを形成し、漢人同化を妨いだとは雖も、無限に多數なる漢人の數に對しては如何ともする能はず、三百年の歳月に漢人文化は完全に八旗子孫を蝕んで武漢の一炬忽ちにして大清帝國の藩屏を崩解せしめ拾收すべからず、封禁の地滿洲既に漢人に滿ち、復奈何ともする能はず、彊弩の末、魯縞をだに穿つ能はざる始末となり了つた。之を要するに、東北民族の科學的研究は將來の解明に俟つべきところ多きも、一般通說に從つて、之を系統別して示せば次の如きものか。（主として「東北年鑑」による）

三　再びバックストンの滿洲族人種論の一節を揭げて本章を結ばんとす。

「滿洲民族夫自らについても種々の異見がある。マンチユウなる名稱の起原すら十七世紀までしか正確には辿り得ない。滿洲族は一般にツングース種の一派として取扱はれて居る。しかし之とて言語學上の類型たるに過ぎないので、人類學的の類型なりや否やは疑問の餘地少くない。このことは不幸にも日本の人類學者鳥居博士の價値ある多數の論文中に於ても混亂を免れない。Zaplicka は東部アジアの滿洲語をアフリカのバンツ語用法に對して頗る巧妙な比較を作成して居ることに見ても單なる言語文字の類型のみから

取扱ふことは危險である。

鳥居氏による滿洲人は、黃皮膚、黑髮にして完全な直立型、少髭にして直立且つ疎、體毛少く、顏面は圓型と長型の二種、眼は褐色となつて居る。私の研究によれば、眼色は淡褐色のものもあり、普通の頭部指標のみに就て見ても更に觀察すべき多くの材料がある筈である。

滿洲人の間には、東部蒙古人間に見らるるものと全く並行的指標をもつものが存在する。其或ものは北方漢人種に非常に近く、或ものは頗る異型である。若し眼球色と皮膚色とを嚴密に觀察すると、同樣な違差を示して居り、或ものは徹底的に黃色い。皮相觀察に於ては、黃又は褐色に分けられ、其露出部は褐色に近く非露出部は白に近い。故に私の解決案はアルピンと黃色人との古代混血(蒙古人種の間に往々起りし)と判定する。滿洲人の大部分の顏面型は東方種よりも寧ろ西洋種である。頭蓋骨測定に於ても、民族的言語的境界を曖昧にして、全く其特長を失くして居る。

シロコゴロフ氏の滿洲人の指標計測の標準的差違檢出は、非常に有益な研究である。完全に之に信賴することは出來ないが、彼の結論は次の通りである。滿洲に於ける支那人は滿洲人の不同性と同一ではなく、北支那に於ける支那人とも其標準違差は非常に相異して居る。彼によれば、支那人間の指標標準違差は、非常に高い。この事實は民族混淆の甚だしきことを證するものである。滿洲人の違差は非常に低い。この事實は其反對を示すものである。滿洲人は同族結婚群と見るべきかも知れない。之は猶研究の餘地ある結論であるが、將來の問題として面白いものである。(Ibid. p. 190)

第五章　古代漢族文化と滿洲族文化との交渉

一　近世文明史家 H. G. Wells は其「文化史大系」に於て支那文明の特質を次の如く論じて居る。

吾人には實際に於て支那考古學に就て未だ何物の知識もない。そこの石器時代に關する斷片的發見しか有つて居ない。而も其全部が Mongolian civilization の範圍を出でて居ない。……漢民族は其文明を自然發生的に獨立に形成したらしい。或近代史家は古代、Sumeria との一脈の連關を想像して居る。勿論漢族文明と Sumeria 文化とは殆ど全世界共通の新石器文明に根ざして居ることは明かであるが、タリム域とユウフラテス域とは

命の危險にさらされたる人民が生息して居る。

第九章　滿洲文化の展望（結語）

一　以上數章に於て、極めて斷片的乍ら滿洲文化に何等かの關係を有つた人類の進化の跡を述べた。滿洲文化論になり得たか如何かは問題であるが、苟も滿洲文化に關係する基礎條件の提示には多少の示唆を與へた積りではある。本編を結ぶに當つて、新しく生れた今や認知せられんとする滿洲國なる一新國家により、滿洲文化が如何なる方向に舵取られんとするかを展望すること必ずしも興なしとしないであらう。

二　滿洲の現實を見る。主要國民たるものは、三千萬漢民族にして、彼等は文化母國四億の民に隣し、文化的經濟的接觸を切り離すこと出來ない。而もこの母體國は政治的禍亂と自然的災害の不斷に繼起する不安定域である。百萬の移植民たる朝鮮民族は、未だ完全なる日本化を成就しない一千萬民族の連繫である。指導的立場に義務附けられた日本民族の在滿數は、僅に二十幾萬にして、其在滿投資は十數億圓に過ぎない。過去三十年の歴史的記憶「國防は富裕より重し」を根本指導精神として、過去の事業を積み上げた如く、將來の經營にも當らんとしつつある。

三　「日本は今迄の世界文化に對して、大した役割を演じて居ない。封鎖文明は人間の運命に大なる貢獻をなし得ない。日本は世界の文化より享受した恩澤に比して、自ら世界文化に貢獻したところ極めて貧弱である」とエチ・ヂ・ウエルスはいふ。果して然りしや、將來も亦然るや？

近代日本の立ち上りは、一八五八年の開國以來、西歐文化の吸收によつて、在來封建文化の基石の上に、ともかくも今日の資本主義文化を建設した結果にある。一八九五年には臺灣を、一九〇五年には南滿洲の一部を、一九一〇年には朝鮮を其文化域の中に織り込んだ。日本的資本主義文化は、これ等の土地に進出し、日本植民地として、日本國民經濟を形成し來た。

南滿洲は日本植民地の一ブロック（不完全ながら）として、南滿洲鐵道を動脈とし、數多の日本資本銀行を背景として投資活動、植民活動の源泉として昨日に及んだ。歴史進行の必然は、南北滿洲を併せて完全なる日本國民經濟單位の中に織り込まんとして居る。

四　現代文化が、經濟的基礎構造の上に立つことは常識である。國民經濟と世界經濟の過渡的現象として、ブロック經濟の成立の可能は相當に信仰者をもつ。既成二大ブロックの一は、蘇露聯邦にして一は米國聯邦である。兩經濟單位は、形式的法律的には國民經濟と稱し得べきも、其四隣の地域經濟に及ぼす獨占的支配力を考慮に入るるときは、所謂ブロック經濟に相當する。更に今や必然的にこの二大ブロックに對し拮抗生存する爲にブロック形成を夢み企てつつあるものに歐洲大陸同盟がある。政治的經濟的に歐洲聯盟の企圖は歴史的に相當の適用を見て居る。神聖同盟、關稅同盟近くは國際聯盟之である。最近の主張者は、墺太利のクーデンホフ・カレルギ伯であり其有力な實行運動者は佛の萬年外相故ブリアンであつたこと周知の事實である。政治的結帶を緩めつつある大英帝國は、其年々開かるる帝國會議を中心として、經濟同盟に結びつきつつある。特惠關稅同盟思想は、オツタワ帝國經濟會議により一段の確實性を增した。

斯く見來るとき、太平洋を挾む地域に於て北に五箇年計畫第二、五箇年計畫により其ブロックを固めつゝある蘇露聯邦、東には米大陸ブロック、南は將に形成途上にある大英國聯盟の一角を挫え、洋の西壁地域を占める、日本、支那、印度支那、南洋諸群島の太平洋文化に對し占むべき地位は何であらうか？

一言にして言へば、太平洋西域經濟圈は無政府狀態である。近代帝國主義國の最尖鋭なる鬪爭舞臺が、ここに見出される。第二の世界戰爭が太平洋上に起るべしとの豫言的宣傳の飛ぶ所以である。過去四十年間に於て、隣邦支那に於ては „Battle of Cencession" "Battle of Sphere of Interests" の絶ゆるひまなく行はれて來た。我滿洲は其最も尖鋭化された地であつた。支那、ロシア、イギリス、アメリカ、日本、戰はあらゆる手段と方法を以て戰はれ來た。日清對抗、日露對抗、日米の對抗、露支對抗、日支對抗。一九三一年九月十八日を起點とする事變は、滿洲國なる一新國家の誕生を見た。危險狀態は一段落を見たであらうか。否々更に〳〵尖鋭化しつつあるのではあるまいか。

何時？　誰が？　この無政府的狀態にある太平洋西壁の地域に秩序と、理想とを與へ得るであらうか。亞細亞の統制！　アジア經濟ブロックの完成。何時、我等の太平洋が、字義通り "Mere Pacifico" たり得るであらう？　或ものは謂ふ、「アジア經濟の統制」は「國防は富裕よりも重し」に比すれば幾分の理想味をもつ。但し如何にして誰の手によつて、この統制が緒につくか。

文化の進展は不斷である。

（完）（一九三一・六・二〇）

昭和七年十一月十八日印刷
昭和七年十一月二十三日發行

【定價金五拾錢】

編輯人　大連市紀伊町九十一番地　中溝新一
發行人　大連市紀伊町九十一番地　佐藤四郎
印刷人　大連市東公園町三十一番地　吾妻力松
印刷所　大連市東公園町三十一番地　滿洲日報社印刷所
發行所　大連市紀伊町九十一番地（舊稱中日文化協會）　社團法人　滿洲文化協會　振替大連二八五〇番
發賣所　東京市神田區錦町一ノ十　滿洲文化協會出版部代理店　海文堂書店　振替東京八〇九九三番

不許複製